

表現する楽しさを通して、 未来を生きる力の 芽を伸ばす

自己表現と想像力を育てる
トキワ松学園の学び

新時代の
一貫教育
vol.3
トキワ松学園小学校の挑戦！
～小学生子育てママさんライターの私立学校見聞記～



小学校校長の百合岡依子先生（左）と、
6年生を担当する藤岡安由子先生（右）。

東京都目黒区にあるトキワ松学園は、
小学校（共学）と中学・高等学校（いずれも女子校）を擁し、
子ども一人ひとりの個性と可能性を大切にしたい一貫教育を実践しています。
今回は、「健康な身体・賢明な知性・豊かな感性をあわせもつバランスのとれた人格の育成」を教育目標に掲げ、
未来をしなやかに生きる力を育むトキワ松学園小学校を訪問。
同校の特色である「劇遊び」の授業を通して見えた、トキワ松学園ならではの魅力をご紹介します。

1 少人数制クラスで、 一人ひとりを丁寧に見守る

1クラスの人数を約24名に抑えた少人数制を採用。
先生と子どもの距離が近いので、学習面はもちろん、
感情の変化や人間関係の様子などにもすばやく気づくことができ、きめ細やかなサポートにつながります。

2 学びに合わせて変化する、 柔軟な教育環境

15分単位で授業時間を設計する「モジュール制」を導入。
教科や学習内容に応じて時間配分を調整し、効率的で深い学びを実現しています。また、教室の仕切りは可動式で、学年やクラスを超えた活動も自在に展開しています。

3 成長を促す、学年ごとの宿泊行事

2年生は学校に1泊し、宿泊体験に慣れるところからスタート。
3年生以降は、年2回（1学期・3学期）2泊3日～3泊4日の宿泊行事を実施し、自然の中での活動や共同生活を通じて、自立心や協働の姿勢を育みます。

4 主体性を育む、安心のアフタースクール

授業終了後、子どもたちが自分の興味や関心に合わせて活動できる場を校内に提供しています。安全な環境の中、専門講師による多彩なプログラムもあり、放課後の時間を活用して、学びの幅を広げながら自律性を育んでいます。

5 一人ひとりに寄り添う、 将来につながる進路支援

系列中学への内部進学に加え、外部の中学受験にも柔軟に対応しています。近年は系列中高との連携を生かし、受験サポートも強化。子ども一人ひとりの希望や個性に寄り添いながら、無理のない進路選択を支えています。

トキワ松学園小学校の
ココがすごい！



1	2
	3
	4

- 1 劇遊びの導入「ウォーミングアップ」の時間。ホールには百合岡先生の元気な声が響き、子どもたちの表情がぱっとほぐれていきます。
- 2 まずはゲームで仲間とコミュニケーションを取りながら、体を使った即興表現へと進みます。百合岡先生も一緒になって楽しみます。
- 3 最後の発表では、いつもは控えめな子が堂々と表現する姿も。子どもたちの新たな一面が自然と引き出される時間です。
- 4 6年生担任の藤岡先生も劇遊びに参加。「一緒に動くことで、子どもたちの普段とは違う表情に気づけるんです」と話します。

校長自ら推進する、 注目を集める「劇遊び」の授業

トキワ松学園小学校を象徴する教育活動のひとつが、「劇遊び」の授業です。この「劇遊び」は、校長の百合岡依子先生が提唱・実践する、演劇的要素を取り入れた表現活動の授業で、もともとは百合岡先生が受け持った学級やクラブ活動の中で始まったものです。2023年の校長就任を機に、現在では全学年・全クラスにおいて、各学期に1回のペースで定期的実施されています。

このユニークな取り組みは、教育界からも高く評価されています。百合岡先生は、児童青少年演劇における優れた女性の活動に贈られる「第34回O夫人児童青少年演劇賞」（公益社団法人 日本児童青少年演劇協会）を受賞。その先進性と社会的意義が、広く認められていることがうかがえます。

英国や米国では「ドラマ」が教科として定着していますが、日本ではまだ広くは取り入れられていません。そのような中で、トキワ松学園の「劇遊び」は、子どもたちの想像力

や表現力を伸ばす、先進的な教育アプローチの一例といえるでしょう。

担任の先生も一緒に楽しむ、 「学校づくりの一環」としての劇遊び

取材に訪れた日は、ちょうど6年生の「劇遊び」の授業が行われていました。この日のテーマは「宿泊行事の思い出」です。授業は“手遊び”からスタート。百合岡先生の明るい声かけに、子どもたちはみるみる引き込まれ、久しぶりの劇遊びの時間を笑顔で楽しみながら、積極的にコミュニケーションをとっていました。

授業の後半では、宿泊行事の思い出のひとつを「写真」に見立てた劇をグループごとに創作・発表します。行事の体験を振り返りながら、そのとき感じたことや心に残った場面を、言葉にとらわれず表現していくのです。百合岡先生は「発表を通して、共通の体験から学びを広げることが大切」と語ります。

この日、授業に参加していた6年生の担任・藤岡安由子

先生の姿も印象的でした。子どもたちと同じ空間で活動とともにし、ときには劇の登場人物として役割を担うこともあるそうです。藤岡先生は「今日が劇遊びだと伝えと、子どもたちから『やった！』という歓声があがるんです」と笑顔で話してくれました。

同校では「劇遊び」を単なる授業の一環としてだけでなく、「学校づくりの重要な要素」として位置づけています。そのため、毎回担任の先生も必ず授業に参加し、子どもたちと一緒に活動を楽しむそうです。この日も藤岡先生は子どもたちのグループに入り、目線を合わせながら対話や表現をともにしていました。「子どもたちから『先生、そこに寝転んで！』なんて言われることもあります（笑）」。その言葉の奥には、先生と子どもたちとの信頼と、のびのびとした学びの空気を感じられました。

劇遊びの効果について「机上の学習では見られない子どもたちの姿が発見できます。思いがけない発想力や意外な表現力、自由な関わり合いが見られます。休み時間とはまた違う“遊びのかたち”の中で、クラスメイト同士の新しいつながりが生まれるのです。たまたま同じグループになった子同士が化学反応を起こす瞬間があり、担任としてもとても面白いです」と話す藤岡先生。授業を通して、子どもたちの新たな一面が見えてくることも多いといいます。例えば、普段は一人で好きなことに熱中する“研究者タイプ”の子が、劇遊びの中で驚くような表現力を発揮し、クラスメイトから拍手喝采を受けたこともありました。藤岡先生は「友だちの良さを見つけたことが、ほかの子にとっても嬉しいことだったのではないかと振り返ります。



演劇と合唱が趣味の百合岡先生。校長室には、お気に入りのカエルグッズがたくさん飾られています。



漢文と声楽が得意な藤岡先生は、大のうさぎ好き。この日はミッフィー柄の服で登場。先生たち自身も“好き”を大切にす文化が、学校全体に息づいています。

「遊び」だからこそ生まれる学び。 想像の世界を広げていきたい

百合岡先生は、「演劇教育という、舞台発表のための“劇”を思い浮かべがちですが、本校の“劇遊び”はそうしたものではありません」と語ります。「子どもたちの想像力を刺激し、それを仲間と共有することが目的です。状況に応じて即興的に反応したり、仲間と協力したりする中で、心と体が育っていく。誰もが自分らしく、楽しく学校生活を送るための活動であり、だからこそ“遊び”という言葉大切にしています」。

最初は恥ずかしがる子もいますが、「無理をさせず、自然に巻き込む空気」を大切にしているとのこと。子どもたちはその中で少しずつ安心感を育み、徐々に自分を出せるようになっていくそうです。

劇遊びの取り組みは、子どもたちだけでなく、保護者からも非常に高く評価されているといいます。年に一度、保護者も交えたワークショップも開催されており、毎回大いに盛り上がるとのこと。

さらに、劇遊びは同校の教育活動全般に良い影響を与えているそうです。例えば、ICT 関連の授業では、iPad の使い方やメディアリテラシーを劇で表現する試みも取り入れられ、教科や特別活動の中で自然に劇が活用されています。「今はまだ、“遊んでほぐす段階”です。ただ、今後は想像の世界をさらに広げていきたい。台本や見立てなどを取り入れながら、非日常の世界に没入するような深い表現活動にも発展させていきたいと考えています。時間をかけてじっくり取り組むことで、葛藤や成長もきっと生まれるはずです」——百合岡先生の言葉には、表現教育の未来への確かな手ごたえと期待が込められていました。

Interview

自分の「好き」を想いのままに表現する

— 互いを理解し尊重し合う芯をしっかりと持ち、
しなやかに生きるための力を育む教育

トキワ松学園小学校では、劇遊びに代表されるように、表現力や想像力を育む教育を通じて、子ども一人ひとりの個性を大切にしています。卒業後も学校や先生、そして友人とのつながりを大切にする卒業生が多いのも、同校ならではの魅力です。そんなトキワ松学園小学校が掲げる教育方針とは、いったいどのようなものなのでしょうか。校長の百合岡先生にお話を伺いました。

子どもが自分らしくいられる 空間づくりを大切に、 「また戻ってきたくなる」 学校であり続ける

— まずは、学校の教育方針や文化についてお聞かせください。

百合岡先生：トキワ松学園小学校では「子どもが自分らしくいられる環境」を最重要視しています。例えば、自分の得意や好きなことを安心して表現できる文化は、まさにその象徴です。教員も自分の「好き」を探究しながら授業に生かし、自然体で子どもに向き合うスタイルです。

子どもたち自身が自分の良さを自覚し、他者の個性を尊重できる。そういった「互いを認め合う」風土が、保護者・卒業生にも共感されており、学校全体を通じて一貫した文化として根づいています。

— 卒業生や保護者との関係がとても強いそうですね。

百合岡先生：はい。毎年、バザーや運動会などの行事には、たくさんの卒業生や保護者の方々が足を運んでくださいます。トキワ松学園中高の卒業生だけでなく、小学校を卒業して他校に進学した子たちも、顔を見せに来てくれるんです。行事の運営を手伝ってくれたり、卒業生コーナーを設けてくれたりと、とても協力的であたたかな関係が続いています。

特に印象的だったのが、ある卒業生の「小学校時代の仲間は、絶対に否定しない」という言葉です。小学校という大事な時期を、安心して自分らしく過ごせたという実感が、そうした言葉に表



れているのだと思います。みんな違って当たり前、でもそれぞれの“好き”や“得意”を尊重し合う。そんな空気の中で育ったからこそ、自分を出すことへの抵抗感がなく、他者を受け入れる力も自然と育まれているのだと感じます。

たとえ海外や他の地域に転校しても、「トキワ松にいた時間」がその子にとっての「帰ってこられる場所」になる。そういうつながりが続いていることに、私たちも日々感動しています。教職員が長く勤めていたり、毎年同じ行事を大切に続けていたりする私学ならではの良さも、学校の“空気”が変わらずに流れ続けている理由かもしれませんね。

— 授業や制度面での特色はいかがですか？

百合岡先生：本校の授業は、「子どもたち一人ひとりの個性や関心を尊重すること」を大切にしており、その考え方を体現する仕組みとして、モジュール制授業を導入しています。これは、一律の時間割やカリキュラムにとらわれず、子どもたちの集中力や学びのリズムに応じて、授業の長さや構成を変えるものです。ときには学習集団自体も柔軟に組み変えることもあります。クラス合同で活動を行うこともありますし、学年を超えての取り組みになることもあります。

また、本校ならではの取り組みとして、6年間同じ机を使い続けるという制度もあります。これは「ものを大切にする心」「時間の流れの中で自分の成長を感じることを重視した教育方針によるものです。6年生の秋には、図工の授業で作った土器を校庭で焼くのですが、その際に机の廃材をたき火の材料として使います。長年愛着を持って使ってきた机が、最後にアート作品を焼く炎として“役割を終える”。子どもたちにとっても印象



深い経験になるのではないのでしょうか。

本校ではさらに、学びの個別化にも力を入れています。例えば6年生の算数では、習熟度別の授業を取り入れています。基礎をじっくり確認したい子、応用的な課題に挑戦したい子、それぞれの希望や理解度に応じてグループを分けて取り組みます。ただし、あえて別の教室に分かれるのではなく、同じ教室の中で“ともに学ぶ”空気を保ちながら進めているのが本校らしいところです。

基礎グループでは先生が丁寧にフォローし、応用グループには中学受験レベルの問題を解いてもらいながら、自主的に考え、友だちと相談し合い、必要があれば先生に質問するようなスタイルをとっています。

本校の先生たちはみな、自分の専門性や好きなことを大切にしながら、日々創意工夫を凝らしています。「子どもたちの“好き”や“得意”をどうすればもっと引き出せるか」を考え抜いている先生ばかりなので、授業は常に生き生きとしていますし、子どもたちの反応から学ぶことも多いですね。



非日常だからこそ生まれる、自立とつながり。 「自分らしさ」を知り、ともに生きる力を育む

—— 宿泊行事も特徴的と聞きました。

百合岡先生：はい。本校では2年生から宿泊行事がありますが、4年生以上は3泊4日の宿泊が年に2回あります。自然の中での山登りや農業体験、仲間との共同生活など、日常とは異なる環境に身を置くことがこの行事の大きなポイントです。

この宿泊行事の魅力は、単なる課外活動にとどまらず、子どもたちの“素の姿”に触れられることにあります。家庭でも学校でもない“第三の場”で、自分で考え、自分で行動する経験が積める。例えば、友だちと小さな衝突を経験しながらも、どう折り合いをつけるかを学んだり、班のために自発的に動いた



り。普段の学校生活だけでは見えにくい子どもたちの本質的な部分が現れてきます。

教員にとっても、宿泊行事は非常に意味のある時間です。子どもたちの意外な一面に気づくことで、その後の関わり方や声のかけ方が変わることも少なくありません。実際、宿泊行事を経たクラスでは、子ども同士の関係性が深まり、自然と助け合う姿勢が強まるのを感じます。

他校と比較しても宿泊日数が長い分、子どもたちの心の動きも大きく、その後の学校生活に与える影響はとても大きいと感じています。

—— 最後に、トキワ松学園小学校で学ぶ子どもたちには、どのような力を身につけてほしいとお考えですか？

百合岡先生：本校の創立者が掲げた理念のひとつに、「皆が自由に楽しく学べばよい。子どもたちがめいめい持って生まれた天分を伸ばしてあげればよいのだ」という言葉があります。私はその精神を大切にしながら、子どもたち一人ひとりが“自分らしさ”を育み、のびのびと表現できる環境をつくっていきたいと思っています。

そのためには、たくさんの体験や出会いが必要です。本校では、表現活動や行事、日々の学びを通じて、多様な刺激に触れる機会を大切にしています。そうした積み重ねが、自分の興味や得意なこと、価値観を深めるきっかけになりますし、何より「私はこれが好き」と安心して言える空気が、自己肯定感につながっていきます。

また、これからの時代を生きる子どもたちにとって、「理解・共感・協働」の力は欠かせないものです。互いの違いを認め、尊重し合いながら一緒に何かをつくり上げる経験を通して、子どもたちには人とつながる喜びや、他者とともに生きる力を育んでほしいと願っています。

“自分の素を出しても大丈夫”という安心感の中で、自分を知り、表現し、他者と関わっていく——。それこそが、人生をしなやかに、そして幸せに生きていくための土台になると信じています。

のびのびと自分らしく成長する 一貫教育が生み出すトキワ松学園の学びの連携

学園全体で子どもを育てる。 中高との連携が広げる学びの可能性

トキワ松学園小学校では、同じ法人の中学・高校と連携した教育も行っています。

例えば春と秋に行われる「親子読書週間」では、中高生の有志が小学生に読み聞かせを行うなど、学園全体で読書活動を盛り上げています。また、中学生が企画したイベントに小学生が参加する機会や、水泳講習会で中高の水泳部の生徒が指導を手伝う場面も。図書室の見学や、中高の授業・部活動体験など、自然なかたちで“学園のつながり”が築かれています。

さらに今年度からは、トキワ松学園中高の田村直宏校長（京都大学卒）による受験指導もスタート。高学年の希望者を対象に、放課後の自習室に田村先生が入り、中学受験の算数について、解法の指導や興味深いトピックの紹介などを行っています。

系列美大とともにつくる豊かな表現環境。 創作の楽しさをすべての子どもに

同系列の「横浜美術大学」との連携も特徴的です。校内には美術作品が多く展示され、子どもたちにとって美術は日常の中にある身近な存在となっています。

毎年、美大の教授や学生が来校し、児童向けにワークショップを実施。表現する楽しさや創作の面白さを直接体験する機会が設けられています。

また、東京の私立小学校が集う「児童作品展」にも毎年参加。他校の多くが代表児童の作品を出展する中、トキワ松学園小学校では全校児童の作品をひとつの大作として出品しています。それぞれの個性が集まり、見ごたえのある作品に仕上がることも多く、「違いを認め合い、個性が光る」教育方針が表現の場にも現れています。



「好き」から始まる探究の芽。 自己表現と深い学びの土台づくり

トキワ松学園では、一貫教育の柱として「探究活動」に力を入れており、その芽は小学校から育まれています。低～中学年から「自学ノート」や「調べ学習」を行う中で、自分の興味を自由に調べてまとめ、発信する力を養います。

その集大成が、6年生による全校発表。一人ひとりが自分の「好き」や「関心」をテーマに、自ら構成を考えプレゼンテーションを行います。手話の実演やクイズなど、表現の仕方も多彩で、聞く側にとっても発見のある時間です。

こうした経験を通じて、自分の思いや考えを堂々と伝える力を身につけ、他者の視点にも触れながら興味関心を広げていきます。中高ではその探究心をさらに深め、小学校での体験がそのまま次の学びにつながっていきます。



取材後記

今回の取材を通して強く感じたのは、トキワ松学園に関わるすべての人が「トキワ松愛」を持っているということ。先生方からも子どもたちからも、「この学校が好き」「毎日が楽しい」という思いが伝わってきました。特に印象的だったのは、百合岡校長先生の明るさとエネルギー。子どもたちと対等に向き合い、ともに楽しもうとするその姿勢が、生徒たちにも伝わり、学園全体にあたたかな雰囲気広がっているのを感じました。卒業後、中学受験を経て外部の学校に進む生徒も多い中で、トキワ松とのつながりを大切にしている卒業生が多いのは、ここで過ごす6年間がいかに濃く、かけがえのない時間であるかの証しなのだと思います。

ライター：金子 菜由

早稲田大学教育学部卒。大学在学中より学生Webライターとして数々の学校訪問記を寄稿。新卒で入社し約15年勤めた大手人材会社では、学生向けキャリア支援事業に従事したのち、企業向け教育研修事業の立ち上げおよび企画営業の責任者を務める。現在は教育系、人材系のフリーライターとして活動中。小学2年生男児の母。



取材・文／ライター 金子菜由 撮影／首都圏模試センター 北一成
※写真の一部はトキワ松学園の提供